

事後評価報告書（日米研究交流）

様式2

1. 研究課題名：「圧電素子・弾性波可視化統合技術による複合材料積層パネルの発見困難な衝撃損傷の検出」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者：東京大学 大学院新領域創成科学研究科 教授 武田 展雄

2-2. 米国側研究代表者：アリゾナ大学 工学部 教授 Tribikram Kundu

3. 総合評価： B

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

我が国の研究体制および実証のための設備と、米国側の研究者の考案した手法が相乗して、共同研究の実が得られ、従来にない、新しい複合材料による大型パネルの検査法が開発された。

これについて、1 件の共著論文と、4 件の連名での国際会議の共同発表がある。

一方、報告書からだけでは、米国側の考案が上記の成果のためにどれだけ本質的な貢献があったのかが明らかでないことは残念であった。

(2)交流成果の評価について

米国側の研究者を毎年 1 ヶ月半～3 ヶ月間日本に招へいして、共同研究が行なわれた。AE 波のセンシングとその可視化による、構造ヘルスマニタリングシステムを開発する、と言う点で、日米の研究目的が共通化しており、良い協力体制が作られていた。

しかし、日本側からは学会参加のための渡航があったのみであり、実質的な協力は米国の研究者が日本側の研究者の研究室に滞在中になされたと見られる。また、米国側で参加しているメンバーは報告書で見る限り 1 名であり、若手研究者や学生の参加が見えず、メンバーの拡がりがない。

(3)その他（研究体制、成果の発表、成果の展開等）

米国側では研究資金の調達が不十分で、共同研究と言っても、我が国が主導して進められたと見られる。